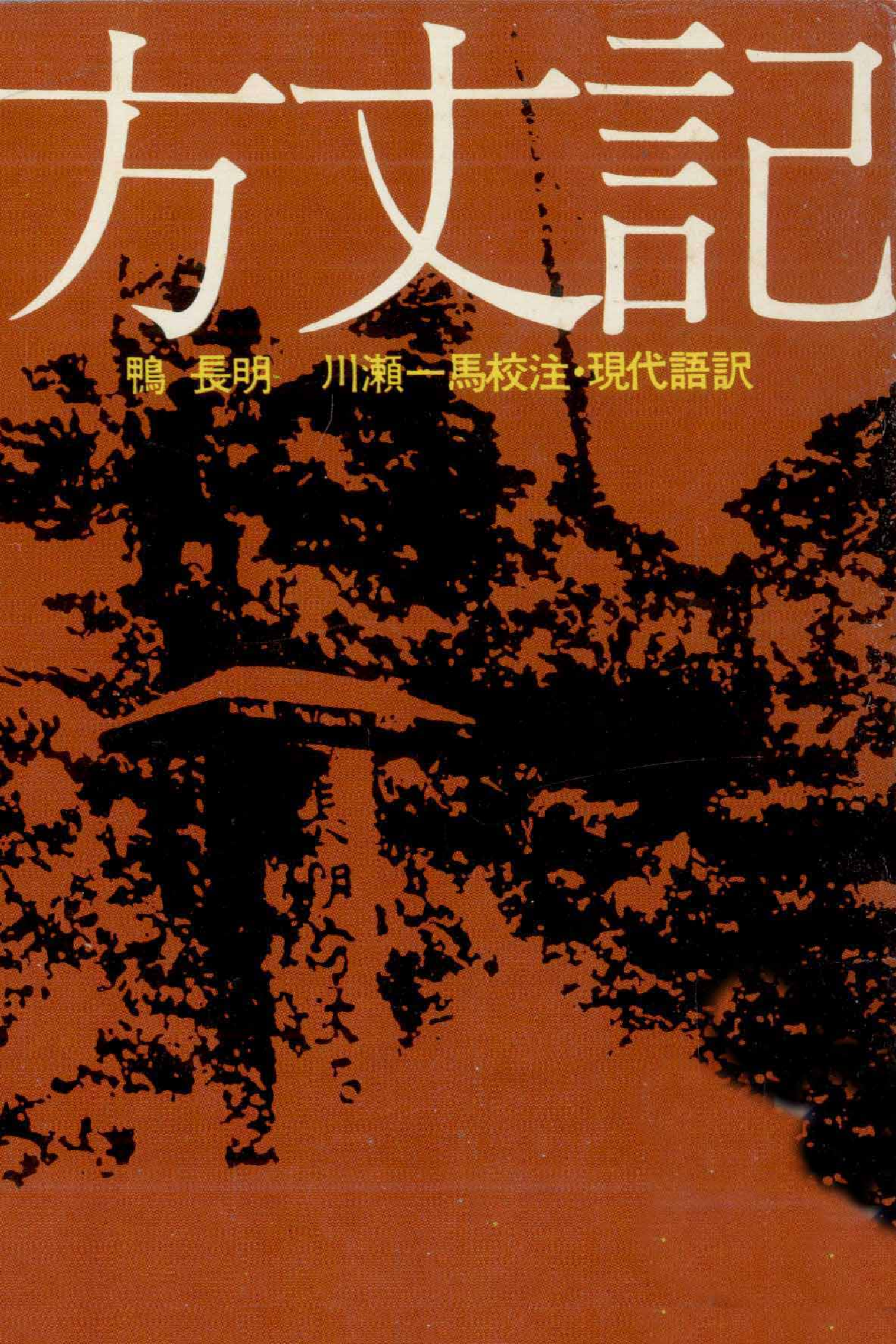
方丈記

鴨 長明　川瀬一馬校注・現代語訳



川瀬一馬〈校注者〉1906年東京都生まれ。東京文理大国文科卒。文学博士。青山学院女子短大教授。著書、「古活字版之研究」（学士院賞）、「古辞書の研究」「夢窓国師・禅と庭園」外七十数冊。

講談社文庫

方丈記

鴨 長明　川瀬一馬校注、現代語訳

昭和46年7月1日第1刷発行
昭和50年5月8日第15刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京　3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Kazuma Kawase 1971
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

講談社文庫

方丈記

鴨 長明　　川瀬一馬校注、現代語訳

講談社

序

鴨長明の方丈記は、わが国中世文学の代表作品である。しかも珍しく七百六十年以前に書きしるされた著者自筆の大型巻子本一軸（国宝。京都府大福光寺蔵）が現存していて、著者の真蹟でそのすぐれた作品が読めるという仕合せがある。それは、世界に比類がないほどおびただしい古書籍・古文書の残存に恵まれているわが日本に於いても、稀有の例に属する。その長明の片仮名交り書きの筆蹟は、極めて達筆で、力強く堂々として、品位に満ちた筆致である。（口絵写真を参照されたい。）

私が（国宝）大福光寺本を長明自筆と論証する一文を公表してから、すでに三十余年を経過した。そして、終戦直後、新註国文学叢書を講談社の高木三吉君と企画して、その第一冊に私が方丈記を担当し、発刊の運びになったのが昭和二十三年の早春であった。それが縁で、また今度、講談社の文庫本の古典現代語訳校訂の初めを、私が引受けることになったと思う。私は今、日本文化の本質を解明し、日本文化史、特に中世文化の実相を広く詳しくあとづけたいと願っているので、そういう際に、再び方丈記をよく読みなおす機会を与えられたことを、非常に嬉しく感じている。私はここで本書によって、古典の本質を明らかにしたいと思う。その現代的意義は、本書を読まれる方がそれぞれ見出されることであろう。

私は、中学生の頃から、方丈記の全文をそらんじている。そして、私が学んだ成蹊学園の恩

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

師、園長中村春二先生は、大正十二年九月一日の関東大震火災の直後、流布本方丈記による口訳を印行して私どもに与えられた。方丈記の簡単な注解はもとより、単行の活版本さえ殆どない状態であったその頃、口語訳本（しかも新しく画いた五枚の挿絵を加えてある。）に恵まれ、中学生の私にとって方丈記は、一層親しいものとなった。この半世紀以前の先生の口語訳は、かねて先生が「かながき」を主張しておられたゆえもあって、今取り出して見ても、新鮮で、甚だ敬意を表すべき内容である。勿論、私が現在ここで意図する現代語訳とはやり方が違うけれど、今度口語訳をこころみて、他のどの訳解よりも参考になった。

ここに、先生の口訳本の序文の一節を掲げ、先生の口訳印行の意図を明らかにしておくことも、私にとっては感懐深く、かつまた、それから五十年目のいま、時世を思い合わせると、大地震こそないが、あの時以上の有様であると思う。

（前略）そのほかいろいろ驚くべきことが打続きますので、かねがねこの方丈記の文章を好んでいる私わ、せめてその中のさびしいけれど清く静かでたしかな心持だけでも広く知らせたいと、夏の終りの休暇（やすみ）に箱根の温泉に行くこととなつたので、この折にかねての希望（ねがい）を果すことになりました。

九がつの一日、このかながきを元暦二年の地震のところまで書き終えて湯にはいりますと、あの大地震に遇いましたので、方丈記が一段と私の心に深い因縁を結ぶこととなりました。

いまの世の人達わ余りに名利権勢色慾などの慾念にとらわれ過ぎているようです。そしてそのため他（ほか）の人をいつわり欺き、強いてわが慾を満足させようと試み、その結果却

て物事をこんがらせてもだえ苦しんでおります。こんな事を考え、私達わこの大地震を天からの尊い誡めとお互に省みて、心の光を磨くことをひたすら志したいものです、稀な地震に遇つて唯驚き心配する外に、この厳しい訓戒（をさとし）を嬉しく忝けなく感謝する心地となり、さらに私共が慎む上にもつつしむことが大切のことと考えるのであります。

大正十二年九月二日　　箱根仙石村にて　　中村春二

戦争直後、いち早く新註国文学叢書を思い立った際、一方にアメリカ進駐軍の指令により、日本精神を鼓舞し武士道を発揮する類の古典は一切印行を禁ぜられていたから、直ちに主要な古典を揃えて出版することができないという条件にもしばられてはいたが、私どもは、やはりあの時世で深く古典に省みることの大切さを思い、方丈記・徒然草・平家物語、それに西行・芭蕉の五つを第一に、まともな学術研究を踏まえて平易に、わかりよい註解を付した善本文を広めようと考えた。その企画は出版事情がうまく伴わず、惜しくも二十五冊でそのままになったが、印刷出版事情の悪い中で、第一冊の方丈記は七千部刷っている。しかし、現在それは殆ど古本市場にも現われず、たまに古書目録にでも出れば、百二十円の原価が、五・六千円の高値を呼んでいる。

その頃、私は吉野の山間に疎開（そかい）していたが、疎開先きで、新註国文学叢書の方丈記全篇を書き上げ、それを携えて旧居へ復帰した。幼児を二人伴い、大阪駅で一晩徹夜して、漸く東京行きの上り列車に乗り込んで難儀をしたことが忘れられない。二十二年の三月初旬であった。

方丈記の諸本については、昭和四年の春、東京文理科大学に入学する頃にはその殆どを既に手許に集めてあった。その後、鴨長明学会などというものも出来たりして、その方面の研究もいろ

いろ行なわれていたが、新註国文学叢書本を執筆する時に、在来の研究業績をすべて検討して、種々の問題につき、まとめてそれぞれ自分の見解を出しておいた。それ以来、二十数年、それを参考にされて幾多の注解（受験参考書をも含めて）、研究が公刊されていることは幸であるが、ここにまたそれらを一応読み較べ、諸書の考究をも踏まえて、新しく本書を出すこととなった。ただ私は嘗て公表した自らの論文著作に対してはあくまで研究上の責任を感じているが、いつも方丈記のみにかかわっていられないため、殊に、校本方丈記を上梓するつもりで準備をととのえ、その稿本も一応出来上っていながら、――手許に未発表の有力な方丈記古写本もいくつかあり、流布本系の唯一の古写本たる一条兼良自筆本なども、昭和二十七年歳末、酒井宇吉君が入手されるや、いち早く見せてくれたので、これを影写・校合しておいたのに、――すべてそのままになっている。しかし、校本の方は、青木伶子氏のすぐれた業績も現れ出て、研究上有益であることは、まことに喜ばしく、従って私は、その方面では改めて別なことをやりたいと考えている。

卒直に申して、在来の文庫本所収のわが古典は、広く教養を高めるためにとうたいながら、それらは専門研究家にテキストを便宜提供するのが目的となっているが如くで、私はかねがね遺憾に思っている。この文庫本は、是非とも、その本来の目的に適ったようなものとして、次々に続刊されることを私は切に希望する。

著者　川瀬一馬

凡例

一、本文は長明自筆の（国宝）大福光寺本により、読みやすいように表記を改めた。原本の表記をそのまま活字に移しかえるのを、学術的な処置と考えているものが多いが、原本を覆製する以外は、原文の意を適確に理解し得るように、漢字仮名その他の表記をととのえることが、実は学術的なやり方である。また、大福光寺本は著者の真蹟ではあるが、著者自からの誤脱が若干見られる。それらは他の古写本によって補正した。

一、本文を内容によって区分し、それに標題を付した。古典を読みとりやすいようにとの配慮である。

一、江戸時代に版本となって一般に広まった系統の本を、便宜、流布本と呼ぶが、方丈記の場合は、江戸初期に出版の際、偶然に採用されたテキストがそれである。江戸時代以前に、室町時代まで多く読まれていた方丈記のテキストとは別種である。その流布本は、大福光寺本よりも前に、長明が一旦成稿した本文を伝えるものとおぼしく、やや長文にわたる記載の多い部分が四箇所ほどある。それらは参考のため、解説の補注に掲げておいた。

一、脚註は簡明をむねとし、現代語訳と合わせて、他に辞典・参考書等を用いず、本文を一通り理解できるように工夫した。脚註欄におさまらぬ場合は補注によっておぎなった。

一、現代語訳は、原文のことばづかいを活かし、そのニュアンスを伝えるよう工夫して訳したつもりである。受験参考書などに見られるように、形式文法にもとづく訳し方をしていないが、原文には即して訳を行なうようにつとめた。これが、いわゆるこなれた訳になっていて、原文を読まなくとも、この訳文だけ見れば、方丈記の本質を理解し得るということになればと願っている。

一、解説は、前に再三度発表したものがあるので、それらを参照して、新しく平明に書きなおした。本書は研究書ではないから、専門的な研究は、新註国文学叢書に論じておいたことなどに譲り、若干の補注を添えるにとどめた。

一、参考として、方丈記関係地図・方丈庵室見取図・鴨長明年譜・参考文献・本文語彙索引等を付した。

一、なおまた、大福光寺本方丈記の巻首と日野山方丈石の遺跡との写真を口絵として掲げた。本書のため新たに名鏡勝朗君に撮影してもらったものである。特に（国宝）大福光寺本の撮影と掲載とをお許しいただいた大福光寺当局に感謝の意を表する。

川瀬一馬　識

目次

口絵　（国宝）大福光寺本方丈記（長明自筆）巻首
日野山方丈庵室遺跡
序　三
凡例　七
本文　一三
一　序　一五
二　安元の災害　一六
三　治承の旋風　一八
四　福原遷都　二〇
五　養和の飢饉　二三
六　大地震　二八
七　煩悩の俗世間　三〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

八　五十の出家　三二
九　方丈（四畳半）の庵室　三三
一〇　いほりの四季　三五
一一　山居の生活　三七
一二　閑居の気味　三九
一三　むすび　四三

補注　四七

現代語訳　五一

一　序　五三
二　安元の災害　五四
三　治承の旋風　五五
四　福原遷都　五六
五　養和の飢饉　五八
六　大地震　六一
七　煩悩の俗世間　六二

八　五十の出家　六三
九　方丈（四畳半）の庵室　六四
一〇　いおりの四季　六五
一一　山居の生活　六七
一二　閑居の気味　六八
一三　むすび　七一

解説　七三
一　鴨長明の生涯　七三
二　方丈記の内容と文章　八三
付　本文の底本ならびに諸本　九〇
(一)　本文の底本（長明自筆、大福光寺本）　九〇
(二)　流布本　九三
大福光寺本になく、流布本にのみ存する本文　九五
(三)　異本（略本）　九六

参考文献　九九
方丈記関係地図　一〇一

方丈庵室見取図　一〇二
鴨長明年譜　一〇三
本文語彙索引　一〇九

方丈記

一　序

行く河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかた(一)は、かつ消えかつ結び(二)て、ひさしくとどまりたる例なし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

玉敷(三)の都のうちに、棟をならべ、いらか(四)をあらそへる、貴きいやしき人の住居は、世世をへて尽きせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、むかしありし家はまれなり。或は去年焼けて今年つくれり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。ところも変

一　序

(一)　水のあわ。

(二)　かたかたでは消え、かたかたではむすんで。

(三)　玉をしきならべたように美しい意。都の枕詞（まくらことば）的なはたらきをしている。

(四)　瓦（かわら）ぶきのやね。当時、瓦ぶきは少く、りっぱな建築がならぶのを意味する。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com